

チヨロエロレイ
ヤーが中年キモ
カメコに簡単に
チン堕ちする話
——体験版

がら堂／どん丸

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

美少女がキモデブオタにいいようにされる話です。しっかりキモデブです。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

登場人物

●
マイ

女子大生。地方住み。可愛い系美人。エカップ。

レイヤー。際どいコスプレで局地的に人気。

都心のイベントがある時はフォロワーの家に泊めてもらう。対価を身体で払うことに抵抗はない。

●
相田

四十代男性。都心住み。未婚。カメコ。

肥満体型で清潔感がなく年頃の女性が顔を顰めるようなタイプ。

本編

「えーっと、そういうのはちよっと……」

「じゃあせめて、キスだけでもさあ」

マイは目の前で顔を赤らめてモジモジする相田から視線を逸らし、はあ、とため息をつきそうになるのを何とか耐えた。

今マイがいるのは相田の家である。都心の良い立地にはあるが築何十年にもなる木造オンボロアパートで家賃は安め。ワンルームでオタクの男の部屋らしくとっ散らかっていて足の踏み場がギリあるくらい。その部屋の持ち主らしく、相田は身なりに全く気の使っていない、四十代の肥満で脂ぎった不健康に色の白い男だった。

なぜそんな男の家に二十歳でモデルか女優かというくらい外見の

優れたマイがいるかといえ、マイが相田の家をホテル代わりにしに来たからである。マイは地方住みのレイヤーで、相田は都心住みのカメコ。SNSで繋がっていて、マイが「都内のコスイベ行きたいけどお金がなあ」と言うのと、相田が「じゃあうち泊まる？」と言って、泊まりに来ることとなったのだ。

こうしてフォロワーの家に泊まりに来ることは、マイはよくある。コスプレイヤーとしてフォロワーがとても多いわけではないが、容姿が良かったため群がってくる男たちはたくさんいるのだ。

だから、見返りなしで泊めてもらえることはないとわかっていた。つまり、身体を対価に泊まらせてもらう、と。実際今まで身体の関係を持ったフォロワーは何人もいる。

しかしまさか、マイも相田がこんな気持ち悪い中年のオタクだと

は思っていなかった。

「それも、あのう……」

「……………シてくれないなら、うちから出てもらうけど」

「えっ!!」

「マイちゃんが選んでいいよ。どっちにするかは」

「そんな……」

顔を青くさせるマイは、交通費でお金を使い果たしている。ここを追い出されたらホテルどころかネカフェにだって行けない。ごくりと唾を飲み込んだマイは、仕方なく小さく頷いた。

「うほおっ♡ マイちゃんとキスっ♡」

「ううっ……」

「早く早くっ♡」

興奮する相田は大層気持ち悪かったが、マイは覚悟を決めた。キモオタとやったことがないわけではない。

マイは自分の顔の倍くらいありそうな間の顔に近づけると、唇を少し突き出して「ちゅっ♡」と触れるだけのキスを送る。

「はあはあ♡ かわいいなあマイちゃん♡ もっともっと♡」

「うう……ちゅっ♡ ちゅっ♡」

タコのように突き出されたガサガサの唇に、マイのうるつやの小さな赤い唇が何度も何度も触れる。初めはそれだけでイキそうなほど喜んだ相田だったが、段々つまらなそうな顔になる。

「はあっ、マイちゃんっ、そんな可愛いだけのキスじゃだめだよっ

♡」

「ひっ!!」

手汗のすごい両手で顔を挟まれてマイが怯えたと、相田は自分からマイの口を塞ぎ、いきなり濃厚なものへと変わった。

ちゅばちゅぼろむちゅう……♡♡　じゅぞぞずびよおお♡♡
ぐちやべちよぶぢやぶっ♡♡　ぬっちやぶちゅっぺえろんれるんご
っく……♡♡♡

（ひいいいっ！　舌ああああっ！　きもちわるいくさいやだやだや
だあっ……！）

相田の汚らしい唾液まみれになってデープキスされているマイだが、相田のねっとりしたキスは思いのほか気持ち良く、マイの顔は段々赤くなっていった。端的に言って相田はキスがうまかったのである。

「っぶあぁー！」

「ふあああ……」

ようやく解放されたと思ったら、今度はマイは相田の口臭の臭い息を吹きかけられた。ひどい匂いの吐息に涙目になっているマイを見て相田はさらに興奮する。

「わかった？♡ キスはこうやってするんだよ♡ マイちゃんもやって♡」

「えっ……」

そう言つて、相田はまたマイの顔を手で挟み込む。そして、自分の口にマイの唇を無理やり押しつけてきた。

「んぶるるるっつっ！！」

「んぢゅうっ♡ どうだい？ 僕の味は？」

「んむうううっ……」

「もつとベロ出してキスするんだよお、マイちゃん♡」

無理矢理口の外に出された舌を相田に窄めた唇でぢゅぽぢゅぽ吸われ、マイは嫌なはずなのに感じてしまう。

「はっ、おほっ、ちんぽ勃ってきたよっ♡」

相田の汚いブツを太腿に押し付けられながらディープキスされ、マイは涙目になるが、いくら気持ち悪くても相田のキスは本当にうまいのだ。マイは相田が今まで関係を持ってきたどんな女よりも美人だったので、相田は鼻の下を伸ばしっぱなしである。

「っはー、美味しかったよマイちゃん♡」

やっと解放され、マイはぜえはあと肩で大きく呼吸をする。

「ねえマイちゃん♡ 一緒にお布団入ろうよ♡」

「えっ」

「セックスはしないよ？♡ キスするだけ♡ どうせ布団も一つしかないんだし♡ ね、いいでしょ？♡」

「セックスしないなら……」

マイは相田に逆らえないこともあるが、相田のキスで頭がぼんやりして腰が砕けてきているため、大人しく同じ布団の中に向かい合って入った。ただでさえ狭い布団なのでかなり密着することになる。同じ布団に入ると、相田はまた口を突き出してマイにキスを迫った。

「んちゅ♡ はあ、マイちゃん可愛い♡ 可愛いなあマイちゃん♡」
「んむうつ♡ んっんっんっ♡」

相田はマイの顔を舐めるような勢いでマイにキスをする。相田は気持ち悪い中年ではあるが、イヤイヤだったマイも段々目がとろ

んとしてきて、自分から舌を動かすようになってくる。

「はあ♡ マイちゃんのお口おいしいよお♡ 僕のペロ、猫ちゃんみたいにペロペロして?♡」

「ん…♡ ペろっ…びちゃっ…」

マイは言われるがまま、チロチロと可愛く小さな舌で相田の大きな舌の上に乗る細かい汚れまで丁寧に取ってやる。

「はあはあ♡ マイちゃんマイちゃん♡ 服脱がしている? いいよね?♡ セックスしないから、いいよね?♡」

「…はい…♡」

相田はマイの返事を聞く前に「シャツの裾を掴んで捲り上げていく。紫色の大きなブラジャーに、相田の視線は釘付けになった。

「ああ…♡ おっぱいすごく綺麗…♡ ブラジャーは自分で外

して？♡」

「はい……♡」

Tシャツを剥ぎ取られたマイは、言われるがまま背中に手を伸ばし、ホックを外した。

（私、なんでこんなキモいおっさんの言うとおりにしてるんだろう……♡）

そんなことを思いながら、マイはゆっくり、見せつけるように、ブラジャーの肩紐を肩から抜いた。元々露出度高めのコスプレをしているので、見られるのが好きなのだ。

そしてぶるんっ♡と現れたマイの生乳に、相田はぐくりと唾を飲み込む。

「ああっ……♡　これがマイちゃんの生おっぱいっ……♡」

「あんまり見ちゃだめっ……♡　ちゅっ♡」

相田の視線を遮るようにちゅっちゅっと相田の顔中にキスをするマイに、相田はもうメロメロだ。

「はあ♡　なんてエッチでかわいいんだマイちゃん♡　オッパイ見たいのに、そんな可愛いことされたらたまらなくなるよ♡」

興奮した相田はそんなことを言いながら、何度目かわからないデープキスをマイにしかける。

「ぢゆるるるううううう♡　じゅぽおお♡」

「んああ♡　んう、んんっ♡　ん——っ♡」

相田に口内を思いつきり吸い上げられ、その快感にマイは腰砕けになってしまう。

「はあ♡　マイちゃん、キスなら後でいっぱいしてあげるから、よ

くおっぱい見せて……♡」

「あっ……♡」

頼りないマイの肩を抑えた相田は、少しマイから離れ、マイの生乳をねっとり見つめた。

「いやらしすぎるおっきなおっぱいにピンクの乳首……♡ 何カツプあるのかな？♡」

「㊦です……」

恥ずかしそうに答えるマイの、男を誘うためだけに存在を許されたかのような大きな乳房は、横になるとぷるんと弾けた。

「はあはあ……♡ ピンク乳首はとってもおいしそうだ……♡ 指でコリコリしてビンビンに勃起させて、べろべろっていっぱい舐めて涎まみれにして、ちゅぽちゅぽって激しく吸いたいなあ♡」

「言っちゃやあんっ……♡」

触られてもいないのに、マイは相田のねっとりとした視線と言葉で身体を昂らせてしまう。それに気づいた相田は、マイの口に自分の舌を突っ込んだ。

「ぐちゅううう♡ れりよおうぬりゅう……くちよつくちゅっちゅ

ー♡ はむっ♡ ぶじゅううう♡ ずぞおぞおぞおう♡♡」

「んふうっ♡ ンンン♡ ンンんっ……♡♡」

「ハアツ……♡ ラブラブキッスキもちいいねえ♡」

まるで恋人同士のような熱烈なラブキッスをしながら、相田の手はマイのショートパンツに伸びる。そしてショーツごと一気に脱がすと、そこにはすでに愛液をしたらせる性器があった。いつのまにか、相田は自身の服を脱ぎ全裸になっている。

「あはぁ♡ マイちゃんのおまたこんなに濡れてる……♡」

「濡れてなんかぁ……♡ んむっ♡」

素直じゃないマイの口を塞いで、相田は飽きもせずマイの口内を啜る。息継ぎのために離れた隙を狙って今度は耳の穴を犯し始める相田。くちゅりという水音とともに熱い吐息をかけられると、マイはぞくりと背中を何かが走った感覚に陥る。

「耳、だめえっ……♡」

「マイちゃんはお耳も性感帯なのかな？♡ 全身ドスケベだねえ♡」

「違……、あっ……♡」

マイの言葉を見殺しして相田は再び耳に舌を入れる。

「ぢゅるるるるる♡ れるるる♡ にゅるにゅる……♡」

「あぁっ……♡」

「はあ……♡　すごいよ……♡　顔もお耳も僕の唾液でベトベトじゃないか……えろいねえ、エロいなあ♡」

相田は興奮した面持ちでそう言うのと、次はマイの首筋にちうちう吸い付いた。

「ああ……♡　痕付けちゃダメなのに……♡」

「いいんだよ、ここは見えにくい場所だから大丈夫だよ♡」

普通の服ならそうだが、マイはレイヤーだ。はつきりと見える位置である。しかし甘い快樂にやられているマイは、相田を止めることはできなかった。

「はあ♡　マイちゃん、僕にぎゅってしてベロチュウして？♡」

「はい……♡」

マイはもう相田に対する嫌悪感は無くなっていた。ただただ与え

られる快樂に喜んでゐる。マイの細腕が相田の太い肩に回り、豊満で柔らかい乳房が相田の不健康に太い胸に密着し、ふにゅん♡とつぶれる。

二人は密着して抱き合つた状態で、何度も何度も激しいキスを交わした。全裸で布団の中で抱きしめあつてディープキスし続けるなんて、もし他人から見られれば愛し合つた恋人でしかない。二人の呼吸は荒くなる一方だ。

「ぷはぁ♡ ラブラベロチュウ気持ちいいねえ♡ ぢゆるるっ♡」

「んう♡ はふう♡ ちゅぱちゅぱ♡ れろおんっ♡」

「もうチンポギンギンだよぉ♡ でもマイちゃんがセックスはだめつて言うから、自分でチンポシコシコするね？♡ マイちゃんオカズに、チンポシコシコするからねえ？♡」

「あ……♡」

どう聞いたって気持ち悪い宣言なのだが、マイは割れ目からだくだくと愛液を漏らした。

その反応を見た相田はさらに鼻の下を伸ばして笑う。そして見せつけるように勃起している自身のペニスを握って上下にしごき始めた。

「ん……♡ マイちゃんにぎゅうってされながらチンポシコるの、気持ちいいなあ♡ はあはあ♡ マイちゃんのオマンコに入れられたいもって気持ちいいんだろうなあ♡ はあはあはあはあ♡ マイちゃん、チュウして♡ ぢゅぱぢゅぱっ♡」

言われるままにまた激しく唇を合わせる二人だったが、すぐに相田の手の動きが激しくなる。絶頂が近いのだ。相田の亀頭からは先

走り汗が出ており、手を動かすたびにぬちぬちぐちよぐちよ卑猥な音を立てる。

「おっおっおっ♡♡ マイちゃんマイちゃんマイちゃん♡ 出そう♡ 出そうだよ♡ 僕の大事な赤ちゃん種、マイちゃんの赤ちゃん部屋にどぶどぶしたいっ♡♡」

相田の言葉で一層強く興奮してしまったマイは、子宮がきゅーつと切なく疼いたのを感じた。

「はあ……出る……！！！！」

びゅる——♡♡ ビュルルル——♡ ビューツツ♡♡♡

相田の汚らしい白濁液は全てマイの胸元に飛び散った。

「ああ……いっぱい出た……♡」

「あ……♡」

「はあはあ……♡」

自分の乳首に飛んだ精液を見て、マイのぼんやりとした瞳にハートか浮かぶ。相田はまだまだ元気に反り返っている自身を見下ろした。

「おっぱいにいっぱい飛ばしちゃったね♡ ピンク乳首に練乳かけたみたいで、おいしそうだよ♡ はあはあ♡ 拭くからちよつと待っててね♡」

布団から出た相田はタオルを持ってすぐ帰ってきた。そして、掛け布団を横にどかし、マイを仰向けにさせて、白濁液で汚れるたゆんだゆんの乳房を拭いてやる。

「んあっ……♡」

硬めの生地タオルが乳首の上を通るたび、マイは甘い声を漏ら

した。その度に相田の肉棒がビクビクと震える。

「はあはあ♡ 拭いてあげてるだけなのに、乳首ビンビンにさせて悪い子だなあ♡」

「あんっ♡」

「このエロデカパイで、色んなチンポ扱いてたんだろう？♡」

「あっ♡ やめてえ♡」

「えっちだねえ♡ えっちだ♡ えろえろえろ♡」

「あっあっあっあっ♡♡」

もう乳房にかかった精液は綺麗に拭い取られているが、相田はタオルで乳首を何度も何度も擦る。

「乳首やあんっ♡ やめてえっ♡ あんあんっ♡」

「僕は拭いてあげてるだけだってば♡ そんなエッチな声出しちゃ

ダメでしょっ♡ えいえいつ♡」

「やああゝんっ♡♡」

相田は手を止めると、マイの上半身を起こしてぎゅうっと抱きしめてきた。そのまままたデーパーキスされる。

「ぷはあ……♡ マイちゃんの乳首にもデーパーなキッスしたいなあ……♡」

「はうう……♡」

「キスはしてもいいんだもんね？♡ 乳首にもしていいってことだよね？♡」

「はひ……♡ キスなら、いいですう……♡」

「うひよ——っっ♡ じゃあ、乳首にベロチュウするねえっ♡♡」
テンションを上げた相田は、そう言うが早い、マイの乳房にし

ンツツ♡♡」

「ああゝゝんっ♡♡ はげしすぎるよおっ♡♡ しらないっっ♡♡
こんなキス、しらないいいっっ♡♡」

「じゃあ今知ろうねえっ♡♡ ほらほらっ♡♡ もうマイちゃんの
プリプリドスケベ乳首ちゃんは、僕のラブラブディープキス無し
では生きていけなくなっちゃったよゝ♡♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡
ちゅっ♡ べろべろべろべろゝゝっっ♡」

「やんんっっ♡♡ はうんっっ♡♡」

相田からの激しい愛撫を受けているうちに、マイは無意識に自分の割れ目に手を伸ばしていた。お漏らししたかのようにびしょびしょのそこを、指先でくちゅくちゅ♡ と弄り出すマイに、相田が気づかないはずがない。

「はあはあはあはあはあはあ♡♡　なんてドスケベなんだマイちゃん♡♡　僕に乳首ペロチュウされながらおまんこいいじいじしちやうなんて♡♡」

「だってええ……♡　はううつ♡　きもちいいの止まんないんだもんっ……♡　相田さんだって、おちんぼシコシコしてたもんっ

……♡」

「ハアハアハアハアハア♡　わかったよマイちゃん♡　君のマンコちゃんがどろんどろんになるまでチューしまくるね♡」

そう言いながら、相田はマイの口に自分の口を引っ付ける。舌の動きが激しくなると、マイは割れ目をいじる指の動きを早めた。相田との激しいディープキスの合間に溢れるマイの声が非常にいやらしい。その声を聞きたび、相田の興奮が抑えられなくなる。

「ぢゆるるんっ♡　ぷはっ♡　おまんこのくちゅくちゅって音がよく聞こえるよ♡　ぢゆるろろろっ♡　ちゅぱっ♡　僕とのラブラブキッズで、おまんこも大興奮してるのかな？♡」

「はああん♡　キスしながらオナニー、気持ちいいのお♡　おっぱいも♡　おっぱいもシてえ♡」

「ちゅっ♡　ちゅっ♡　なんてエッチなんだ、マイちゃん♡　じゃあ、おっぱいとお口と、同時にラブラベロチュウしてあげるねっ♡　ほらっ、こっちにベロ伸ばして♡　そうそう♡　れろろろろろおろろんっっ♡♡」

相田はマイの大きな乳房を両手で中央に寄せて持ち上げると、そこにマイに舌を伸ばすように言った。言われた通りにマイが寄せられた二つの乳首の間に舌を伸ばすと、相田はマイの両乳首と舌を同

時に舐め始める。

「んあっ♡　れろお♡　ちゆるるっ♡　ああんっ♡　これ、エッチすぎるよおっ♡　んむうっ♡」

「ちゅばぶぼッ♡　ぬじゅろろっ♡　らぶらぶっ♡　ラブラブキッスだよっ♡　んふーっ♡　れるっ♡　はあああっ♡　最高だっ♡　おいひいっ♡　可愛い乳首ちゃんっ♡　可愛い唇ちゃんっ♡　可愛い女の子のおっぱいとちっちゃな口を同時犯せるなんて夢みたいだよおお♡」

あまりに強い快感に、マイは自分の割れ目から手を離してしまふほど頭がクラクラしていた。だが相田はそんなことには気づかずマイの口と乳首を堪能する。自慰をしていたせいもあるのか、すでに限界を迎えそうなほどの強烈な刺激だった。

「ぢゆるるるうつ♡　ぷはっ♡　マイちゃん♡　おまんこちゃんにもデイープキッスしたいなあ♡　ねえ♡　いいでしょ？♡　いいよね？♡」

「はうう、お、おまんこにつ……？♡」

「キスならいいんだから、いいよね♡」

「はひ……♡　キスなら……♡」

マイが答えるより早く、相田はマイの両足を持ち上げて、ぱつくりと開かれた割れ目に顔を埋めた。そして思い切り鼻先を押しつけクンカクンカすると、大きく息を吸い込んで肺いっぱいメス臭を含んだ空気を入れる。

「はああ♡　なんていやらしい匂いなんだ♡　びしょびしょスケベマンコ♡　はあああゝすごい濃いい雌フェロモン嗅いでたらちんぽ

ギン勃ちしてくるよお♡ はあはあはあ♡ こんなドスケベおまんこ、早くラブラブキッスして満足させてあげなきゃねえ♡ ちゅうううつつ♡♡

下品な音を立てて一心不乱にマイの割れ目を啜っていた相田は、次はそこに舌を出し入れし始めた。その瞬間それまでとは比べ物にならない程の大きな波が襲ってきて、マイは我慢できず声を上げてしまう。

「んああつつ♡♡ だめええ！ いきなり激しすぎるよおおつつ♡♡ ああゝゝんつつ♡♡」

「ぢゅぼっぢゅぼっぢゅぼっ♡♡ ぐちぐちつつ♡♡ ちるうゝゝゝっ♡♡ チュボチュボチュボチュボツツツ♡♡」

「あうっ♡ あんっ♡ やんっ♡ イクっイキそうっ♡ もうダメ

っ……!!」

「ほらいケツ♡ 俺の唾液まみれになるくらいしやぶり尽くされた
マゾアクメしろっ♡ ぬぶぶっレロオオオオッ♡♡ ちゅぶぼっぷ
はあぁっペロチンポと穴奥舐めダブル攻め喰らえっっ♡♡♡ れ
ろれろっちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼっっっっ!!!!!!
ぐぼくっぽぐっぱあ♡ ぐちゃじゅぞぞおおおん!!♡♡ ベち
よぴちゃペっちやくっちやくちやくちゅ♡♡ ぐりくりぐり♡♡
ごりっこすこしゅこしゅこっ!!」

「ひっ!! イッひやうっ♡♡ んあああっっ♡♡ おまんこペロチ
ユウでイツちやうよおっっ♡♡ あああアアッ♡♡♡」

相田の激しい口淫に、マイはビクビクウウッ! と全身を激しく
震えさせて達してしまった。口の端から唾液を垂らす舞を見てニマ

ア♡　　といやらしく笑った相田は、ヒクヒク蠢いている割れ目に再び口をつける。

「ぢゆるっずちゅううううっ♡♡　美味しいマン汁全部飲ませて♡　ぢゅばぢゆるるるるるっ♡♡♡」

「ふわあっああ…♡　そんなに強く吸わないで…♡ひゃあんっ♡♡♡」

激しい絶頂を迎えたばかりだというのに相田は容赦せず、今度は口全体でマイのおまんこの中全体を包み込むようにして、敏感になりすぎている粘膜を強く強く吸引した。子宮口にぴったりと押しつけられた唇も、膣内のひだや肉豆を余すところなく這い回り、快感神経が剥き出しになっているクリトリスまでまとめて扱かれたらひとたまりもない。腰の奥から湧き上がってくる甘い痺れに耐えられず、

考える。

「ねえマイちゃん♡ 次はおじさんのチンポでキスしたいんだけど、
どうかなあ？♡」

「お、おちんぽで、キス……？」

「うん♡ マイちゃんの下のお口に、チンポでキスしたいなあ♡」

「そ、それって、あうう……♡」

「ねっ？♡ キスだから、いいよねっ？♡」

マイは顔を真っ赤にさせて、こくんと頷いた。何度もイカされて
正常な判断などできなくなってしまったのだ。

「キスなら、いいです……♡ マイの下のお口に、おじさんのおち
んぽで、キスしてください♡♡」

「ハアハアハアハア♡♡ なんていやらしいんだマイちゃん

♡♡　かわいい君のおねだりは、しっかり聞いてあげないとねっ
……♡♡」

何度もイッてムレムレの女性器に、一回出したとは思えないほどバキバキに勃起した赤黒い巨根が当たる。相田に足を大きく持ち上げられているせいでマイの視界に自分の女性器にその巨根が当てられているところをはつきりと入っていて、（こんなおっきいので犯されちゃうんだっ……♡♡）とマイの女性器はパクパク♡　　いやらしく開閉する。

「ああっ♡♡　おまんこもいやらしすぎるよマイちゃんっ♡♡
こんなパクパクしちゃって、そんなにチンポキスしてほしいんだねっ♡♡」

「あうう……♡♡」

チヨロエロレイヤーが中年キモカメコ に簡単にチン堕ちする話―体験版

2021年12月11日発行

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @donmar18